

後藤みな子小説事典

凡例

- 一、後藤みな子の小説について、初出順に書誌、あらすじをまとめた。
- 一、書誌は初出と初刊を記した。
- 一、初刊には書影を付した。
- 一、文末に担当執筆者名を記した。

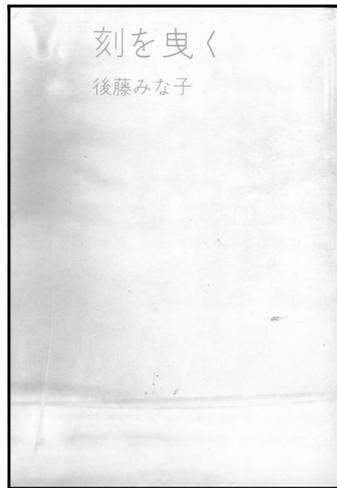
刻を曳く

初出 「文藝」(一九七二・一二)

初刊 『刻を曳く』(河出書房新社、一九七二・八)

結婚二ヶ月を過ぎた秋の終わり、燿子は夫の道郎とともに初めて姑の家を訪ねる。帰る頃になり姑は結婚式を欠席した燿子の母

岩下祥子
楠田剛士
栗山雄佑



の病状を尋ねる。道郎もまだ会ったことがないという燿子の母を引き合いに「変わったご家庭ね」と姑は言った。

昭和一九年一二月、燿子の父・成雄は長崎の大波止から出征した。翌年長崎に原爆が投下され浦上で勤労奉仕中であつた中学生の兄・文成が命を落とした。一人で兄の最期を看取つた母は精神を病む。母と燿子それに父の友人の永田医師が燿子らを支えるようにして三人で網場村に暮らすこととなる。永田もまた妻と三人の子を原爆で亡くしていた。翌冬に父が復員したのを機に永田は家を去り、父、母、燿子は長崎市街に移つた。母の精神状態は良くなることはなく燿子が高校に入学した年の一二月に父は母を入院させた。短大卒業後燿子は友

人の紹介で東京から出張で長崎に来ていた道郎と出会う。他者に立ち入ろうとしない道郎に安堵と解放感を覚え「平凡な仕合せが欲しい」と結婚を決める。兄の死と母の病について道郎に真実を言わぬままだった。燿子が初めて姑の家を訪ねた後の一二月の初め道郎は燿子に「ケロイドないんだね」と言った。結婚式の直前に道郎は成雄からすべてを聞かされていたのだった。ショックを受ける燿子に道郎は続けて「子供は生めない」、「おふくろには、黙っててくれ」と冷たい言葉を放った。

結婚式以来三ヶ月ぶりに燿子は父と会った。結婚生活が行き詰った燿子はほのかに父と暮らすことを思い描いていた。しかし父は恋人の存在を明かし長崎で同居することを燿子に報告する。燿子は平静を装って話題を移し「永田先生お元氣かしら」と父に尋ねるが、予期せぬ父の返答に驚く。永田は原爆症で一ヶ月前に他界していたのだ。上京前に燿子が結婚の挨拶に訪ねた際は大きな病院を経営し新しい妻子と元気に暮らしていた永田の訃報に燿子は狼狽える。続けて父は、母を英彦山にある母の実家に帰したことを燿子に告げる。さらに、母の病の原因は子を亡くしたショックではなく、原爆の放射能に含まれる脳神経を侵す毒素による直接的なものであることが分かったと言う。学長になり恋人と新しい生活を始めようとする父を前に、燿子は心の中に抑えていた感情があふれ出し、原爆が投下された後の母の様子や、母から聞いた兄の最期、燿子と母と暮らし父の代わりになろうとした永田のことを初めて父に伝える。

(岩下祥子)

三本の釘の重さ

初出 「文藝」(一九七二・四)

初刊 『刻を曳く』(河出書房新社、一九七二・八)

麻子は、診察室から離れの二階の部屋を見ながら、母が今夜も眠ったままでいることを願う。母は長崎に原爆が投下された日の夕方に、兄の死体を浦上川で発見したときから狂気に囚われた。その後、ニューギニアから復員し、柏村にある祖父の診療所に帰ってきた父のお祝い会の最中に母は劇薬を飲もうとし、離れに閉じ込められた。祖父を捨てて長崎の大学で教授になった父とも離れた麻子は、母を狂気に追いこんだのは、母の血筋なのか、それとも原爆なのかを考えつつ、自身にも到来するであろう狂気に怯えながら、八年間母を遠ざけて暮らしてきた。ふと、母の血筋を探りたいという衝動にかられた麻子は、母方の祖母の家がある海辺の村へと向かう。しかし、祖母エツは麻子が想像していた人物ではないばかりか、麻子が被爆者であることを元に「嫁にいきなさるとは、むずかしかですな」と告げた。

三ヶ月後、麻子は祖母の死亡通知の葉書を受け取り、宛名にあった病院を訪ねた。祖母と同室だった梅崎という女性は、死亡通知はエツ自身が書いたものであり、彼女は病室に打ってもらった釘に襦袢を裂いた紐をかけ首を括って亡くなったのだと告げた。母が譫言のように呟いていた生家近くの椎田の浜を歩きながら、麻子は父のように自身は新しい家庭を築くことはできないこと、さらには狂気の血を自身限りで断絶することしかできないと考えた。

(栗山雄佑)

炭塵のふる町

初出 「文藝」(一九七二・八)

初刊 『刻を曳く』(河出書房新社、一九七二・八)

昭和天皇行幸の前日、彩子は、ボタ山からの炭塵が混じる川に架かる橋の上で、父から翌日に母が家から出ないよう見張るよう頼まれた。原爆で亡くなった兄を浦上川のそばで茶毘に付した日から、母は狂気に囚われていた。ニューギニアから復員した父は、母と彩子を連れて、三年前から炭鉱町の町立病院の院長として赴任した。当初は町の男たちを罵っていた父は、次第に男たちと同じように昼間から酒を飲み、夜な夜な炭鉱夫の派遣請負をしている富田の家で不倫をするようになった。

刑事から母を閉じ込めるよう言われた理由を明かさぬまま、長崎への転居をも仄めかす父に対し、彩子は原爆投下によって兄を喪ったときから母と自身に降りかかった苦難の責任を父に問おうとするも、それは言えず仕舞いのままであった。

行幸当日の朝、急に入浴し化粧を始めた母に不穏なものを感じた彩子は、診療室の父を呼びに行った。その一瞬を突いて、母は家を飛び出し、「天皇陛下ばんざい」と叫びながら天皇の車を追ひ、橋の欄干から飛び降りた。母を追っていた彩子は、原爆投下後に母と共に兄を捜した光景を思い出しながら、「かえせ！ おにいちゃんをかえせ！ おかあさんをかえしてくれ！」との言葉を口の中で叫び続けながら、天皇の車を追いかけた。

(栗山雄佑)

雲の穴

初出 「文學界」(一九七三・七)

「私」がアパートに帰ると和朗が部屋の中で待っていた。和朗の知り合いに、被爆者の声を丹念にカセットテープに録音している人がおり、「私」から頼まれた和朗がテープを借りてきたのだった。「私」は子供のころ母とともに長崎で被爆した。その日から父が復員した日まで記憶が途切れ、精神を病み亡くなったと噂される母のことを思い出せなくなっている。父との関わりにも記憶の空白があり、不倫相手の和朗と中途半端な生活を送っている。

再生したテープには老いた男性の声が入っていた。八月九日は微用で三菱の工場におり、妻と小学三年の息子を原爆で亡くしたという。火の海を逃げるときに見知らぬ女の子を背負って走った話から、「私」は女の子が自分ではないかと考える。

「私」は記憶をたぐり寄せるために老人を訪ねる。老人はテープに語ったことを後悔しており、消去を求めながら「忘れとつとやったら、忘れとつてもよかやなですか。無理に嫌なことを思いだしてまで、被爆者にならんでもよかです」と話す。「私」は忘却に救いを求めようとする老人の口調から、和朗との生活や老人との会話もいつか忘れるのではないかと恐れる。だが帰る途中に雨だれを見ながら、逃げて逃げなくても同じことの繰り返しのように感じる。長崎原爆は雲の穴から見えた競技場を照準に投下されたが、「私」は記憶が「茫漠とした昏い穴」であっても「被爆の記憶の空白も、父への疑念もすべて負っていこう」と考えるのだった。

(楠田剛士)

海鬼灯

初出 「風景」(一九七三・九)

ある日の夕方、「私」は長崎原爆病院の長期入院患者にインタビューをする仕事のために、松山みよという老女の病室を訪れる。老女は被爆後からずっと入院しており、一緒に入院していた夫は二年前に亡くなっている。女学校に通っていた娘は原爆で亡くなった。

老女は質問に対して淡々と答えていく。ここが現住所だといった老女の言葉が「私」の胸底を深くえぐる。老女が不意に「あなた、小説をお書きになつてる？」と質問すると、「私」は「狂った母を書いています」と答える。「つらいんでしょうね、きっと」という老女の言葉もまた「私」の胸奥を突きさす。城山町の自宅で被爆した母は、田舎の祖父母の家で精神を病んでいく。そして離れに閉じこめられ、「私」のことも分からなくなった。「私」は母を書かなくなることは母を「安楽死」させることだと考える。

「私」は老女の身の回りの様子を見ながら、母の手首に軟膏を塗ったこと、母が忘れ物を届けに小学校まで追いかけてきたこと、母が海鬼灯を口の中で鳴らし続けていたことなどを思い出す。八年間、母に会っておらず、周りの人間も母を死んだものと思いこんでいるが、今日初めて「狂ったまま生きてる」と言葉にすることができた。黙ったまま病室を出た「私」は、母がぐびいと鳴らした海鬼灯の音が背後から追いかけてくるように感じる。それが母の魂を刻む鼓動のようにも感じて、今回の仕事を断ろうと考える。(楠田剛士)

風待ち島

初出 「文藝」(一九七七・三)

年の暮れ、出版社に勤める耀子は、島の資料を探すために古書店を訪れる。耀子には離婚歴があり、妻子ある浩と二年以上関係を持つていた。前の晩、浩は家庭を建て直したいと去って行く。耀子は島に襲われる夢を見たことで、島に住む母について考える。母は長崎原爆で被爆し、精神障害にかかっていた。療養のため長崎市の沖合にある華島に住んで八年になるが、耀子は一三年間会っていない。古書店主から渡された本によると、華島には家族の誰かが瘡にかかると親子であつても切崖から突き落とす掟があるという。

耀子は長崎の波止場からバスに乗り、船着き場へ向かう。夫との離婚や、浩との間にできた胎児を墮胎したことなどを考えながら船の出発を待つ。

華島に到着し、母の方代まさよのいる家に着くと、母を世話している保代が出迎える。対面した母は、耀子に子供の頃のように接し、防空頭巾の準備や焼けた御真影のことを気にかけている。三〇年前の戦時のまま生きている母を見て、耀子は失った日々を取り戻すことができなれど感じる。その帰り、切崖の場所を保代に尋ねると、自分の家のすぐ裏にあるという。耀子はいままで母を投げ捨てて生きてきたと思つていたが、自分のほうが母から投げ捨てられたのではないかと考える。帰りの船に乗り、島を再訪することはないだろうと思いつつも、波飛沫と霧雨に濡れながら未来の子供のことを考えるのだつた。(楠田剛士)

桐の露地

初出 「燭台」三（二〇〇二・九）

香子は露地に面したアパートに引越した。交際中の作家・脇田徹は、この付近で妻の比佐代と新婚時代を過ごしたと懐かしむ。徹と抱き合った夜、香子は浦上で被爆し命を落とした兄・成朗の夢をみる。香子が書いた詩「白い骨」を徹は読み「小説を書いてみないか」と言った。

長崎に原爆が投下された日、香子と母・まきは英彦山にあるまきの実家に疎開していた。大学病院の医師である父・俊は出征中でおらず、兄は浦上に残り三菱兵器の学徒動員で勤務中だった。兄の最期を看取り帰ってきた母は精神を病む。以来香子は原爆のことも兄の最期もその時の母の様子も、父にさえ言わずにきた。「普通の生活」を望み香子は新聞社に勤める道生と結婚するが、結婚生活は破綻し別居となった頃徹と出会ったのだった。

父は学長に就任し長崎の家に身の回りの世話をしてくれる女性を迎えていた。東京に出てきた父と香子は久しぶりに会う。母が父の戸籍を抜いていたことを聞き香子は驚いた。父は母の両親の養子だった。籍は父が弁護士に頼んで元に戻したという。今も母は英彦山の実家で療養中だった。別れ際香子は父に、母が父から送られる書留封筒をすべてとっていることを伝えようとするが、伝えそびれる。香子は後悔の念を抱きながら桐のある露地の家路につく。

（岩下祥子）

樹滴

初出 「すとりんぼり」一（二〇〇六・七）〜八（二〇一〇・四）

初刊 『樹滴』（深夜叢書社、二〇一二・七）



肺炎で入院中の父を見舞うため香子は自宅のある北九州から浦上の大学病院に毎週末通っている。嚙下障害を改善するために手術を受けた父は声を失う。父はかつてこの大学病院の教授であった。今は父の教え子のK（洋）が教授を務めている。母・まきの実家の縁戚で香子の幼馴染でもあるKは、香子と結婚するものと思われていたがそうならなかった。

香子の兄は長崎に投下された原爆によって命を落とした。以来母は精神を病んでいる。ニューギニアから復員した父は、廃墟と化した浦上の街を見て、町医者になり平凡で温かな家庭を造ろうと言った。しかし廃墟の中の焼けた樹から光る樹液の粒を見た父は、断ろうとしていた教授のポストにつき、医学部長、学長と出世していった。母は自宅療養から大学病院に入院した後、故郷の英彦山の麓で叔母に看られながら暮らしている。母の病を機にKと香子の結婚話はなくなり、香子は東京で最初の夫・道生と結婚するが数年で離婚。既婚者の徹との交際中に香子は母のことを小説に書き賞を取る。しかし香子は普通の家庭、普通の生活を求めて徹と別れ、小説の執筆もや

めてしまう。北九州で再婚し娘の恵を授かった。恵は香子が小説を書いていたことも、香子の母が生きていることも知らないままでいる。

手術は成功したものの術後目を覚ました父が「LASTだ」とメモに書き、香子は父の死期が近いことを覚悟する。嚥下障害は改善されず、ついに鼻孔栄養となり父は痩せていく。中学時代からの親友で看護師の雅美が献身的に父に付き添ってくれていた。秋の終わりに、Kが年明けにゲッティンゲン大学に発ちその後妻とヨーロッパを旅行することをK本人から聞かされる。父を亡くすその瞬間にKがそばにいないという不安から香子は貧血を起こし倒れるが、雅美は「他の先生がいるし、私もいる」と香子に寄り添う。父の病室で雅美と三人で年を越し、元日の午後香子が浦上の街を歩きに出ているとき、父は危篤となった。香子が急いで病室に戻ると父の顔には汗が噴き出していた。樹滴に覆われた樹のような父の死の姿だった。

父の死の前、母が実家の近くの佐原医院に入院したという手紙が叔母から届いていた。四十九日を終え香子は佐原医院を訪ねる。佐原医師は父の幼馴染で大学の後輩でもあり、父は見舞いに来た佐原医師に母のことを頼んでいたのだった。母は軽い脳梗塞で入院しており、いつ昏睡状態に入ってもおかしくないという。延命措置をせずに自然に死なせてほしいと香子は佐原医師に頭を下げた。香子が長い間正視できなかつた母の顔は思っていたよりもずっと穏やかで、眠っている臉は恵の赤ん坊の頃に似ていた。その後昏睡状態に入った母は誰もいないほんの少しの間に死を迎えた。亡くなった母は笑って起きそうな顔で、香子の記憶の底にある、香子が追いつめた母の顔だった。焦土の浦上から母を取り戻し森へ還すことができたと思つた。

(岩下祥子)

藤棚

初出「燭台」四（新日本教育図書、二〇〇八・六）

みなもと祖母の信は、善照という尼がいる寺と一緒に訪ねる約束をしていた。みなみが約束の時間に祖母の家に行くと、祖母は家の前の橋の袂でぼんやりと川を眺めていた。庭先の藤の花は満開だった。みなみは祖母の横顔を見ながら、母・咲を捨てた祖母への嫌悪感を募らせる。一週間前も祖母の言動に不快な思いをしていたが、新聞社勤めで忙しい夫にいつも取り残されている気がして、誰かに会いたい気持ちで再び祖母の家を訪ねていた。祖母が提案した尼寺行きに関心を持ち、一緒に行く約束をしたのだった。

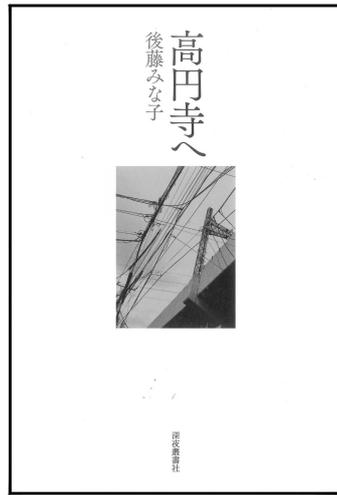
その数ヶ月前、みなみは見知らぬ人から手紙を受け取っていた。母が三歳のときに養子に出されていたという内容をはじめは疑うが、戸籍謄本の微かな瑕疵から養子に違いないと確信する。実際の祖母は想像と大きく異なり、母の面影は微塵もなかった。何度も会う度に、祖母にだけは似たくないという気持ちが強くなっていく。祖母と一緒に寺を訪ねた後、みなみは夫のいる東京へ転居する。冬の初めに祖母の家を訪ねると藤棚がなくなっていることに気づく。近くにいた新田岬から声を掛けられ、みなみが来るのを待っていたこと、祖母が亡くなり藤の木も急に枯れたこと、窯を閉めて外国を放浪する予定であることを聞く。岬は高名な陶芸家だが、再婚した祖母の息子（母の異父弟）であり、みなみのために骨壺を焼いていた。その夜、みなみは岬と一緒に骨壺に入れた酒を飲み、岬の腕に抱かながら深い酔いの底に落ちていく。

(楠田剛士)

高円寺へ

初出 「すところんぼり」九(二〇一〇・一一)〜一二(二〇一二・一〇)、「イリプス II nd」一三(二〇一四・五)〜一七(二〇一五・一一)

初刊 『高円寺へ』(深夜叢書社、二〇二一・一〇)



ある日の夕食時、朝子は夫の隼から「このまま、この生活を続けていっても、仕方がないと思う」と告げられる。今の住居に引っ越した冬に流産した以降、朝子は身籠もることがなく、その頃から二人の距離は遠ざかっていた。しかし、引っ越しの運送屋も、隼の上司の大賀も、朝子に離婚を考え直すよう説得する。大賀に一方的に離婚を考え直すよう説得された夜、高円寺の白い舗道を見た朝子は、かつて住んでいた炭鋤町の記憶を思い出した。

朝子の母は、中学生の兄、文を浦上に落ちた「マッチ箱の爆弾」で亡くしたときから「手の届かない世界」に行ってしまった。さらに母は、天皇が町に行幸した日に天皇の車列を追いかけた結果、精神病院に入院し、その後父とは離婚し実家の近隣で療養することになった。その記憶を思い出した朝子は、天皇の車を追う母の後を追いかけることが出来なかったこと、その記憶を封じ込めてこれまで生きてきたことが、隼との生活が破綻した要因であると考えた。

隼との住居を出た朝子は、高円寺のアパートに居を構えた。高円寺には、作家の佐方順一の妻のゆきが経営するバー「ボア」があり、文学関係の人がよく集まっている。隼と別居した三ヶ月後、隼から手紙と荷物が送られてきた。その荷物の中にあつた、自身と母が写っていたらしき破られた写真を見た朝子は、その写真を破つたのが、他ならぬ自分自身であることを思い出した。その後、ゆきと話すなかで、朝子はかつて母が母娘関係の証明を「産んだ」記憶に求めその記憶の喪失に怯えていたこと、自身も母を「ママ」と呼ぶことを禁じられていたことを思い出した。朝子の話を聞いたゆきは、朝子が「ボア」に集う人々を知ってから小説を書きはじめるであろうことを予感していたと明かし、書くのであれば自らの全てを曝け出すことが必要であると告げた。

朝子が小説を書くこととしていることを聞いた「ボア」の常連客、神元は、一旦は朝子に「小説は人に勧められて書けるものではない」と告げた。しかし、神元は同人仲間の佐山に朝子宛の手紙を預けており、そこには「今の状況から抜け出すため」に「小説を書いてみないか」との言葉があつた。再び神元と会つた朝子は、彼と食事を取つたKホテルでベトナム戦争に向かうであろう米軍兵士を見た。そのとき、朝子は敗戦後数年が経つた長崎郊外の島にいた、一人息子が戦死してから頑なに雨戸を閉め切つたまま亡くなった老婆を思い出した。その話を聞いた神元は、「やはり小説を書くしかないな」と朝子に告げた。その後、隼と札幌で再会した朝子は、「君は昔から、文学をやりたいかつたんだと思う」と告げた隼に対し、「母が命をかけたような生き方は出来ないけど、あの母を書くことはできると思う」と伝えた。

(栗山雄佑)

川岸

初出 「イリプス II nd」一八(二〇一六・三)〜二七(二〇一九・三)

榎はインタビュー番組の仕事で福岡市のテレビ局に通っている。

仕事は楽しいものの、文学から遠く離れたことを痛感している。夫は新聞社に勤め、娘は京都の美大で学ぶ。二〇数年前、高円寺に住んでいた頃、忠雄と「正妻公認」の愛人関係にあった。忠雄の勧めで小説を書き始め、文学賞を受けたが、関係が崩れて別れていた。最初の結婚で小倉に住み、再婚して再び小倉で暮らしている。

榎のもとに忠雄の妻・咲子が電話をかけてくるようになったのは、忠雄が癌で亡くなった後からだ。忠雄には別の女性との実子・弘がいて、財産分与の問題が生じているという電話だった。亡くなる半年前に忠雄から電話があり、妻に秘密で遺言を書きたいと話していた。一方の榎は、中学・高校時代を過ごした諫早を誰にも言ったことがなかった。水害で川岸にあった家が流され、友人たちを失ったことを思い出さないように生きてきた。

一ヶ月後の電話で、咲子は甥・洋二を養子にして母親になったと話す。榎は川岸の家の母について思い出し、母から水害直前に家を追い出されなかったら自分は生きていなかったかもしれないと考える。咲子の最後の電話は四ヶ月後にあり、儂いという咲子の言葉が印象に残る。榎にも全てが儂いものと思えた。

一ヶ月後、旅芸人のKさんを訪ね、一緒に海岸を散歩する。番組で知り合ったKさんはロシア人の父と日本人の母の間に生まれた婚外子で、現在三人の内弟子と家族のように暮らす。どこで小説

を書いても残るというKさんの言葉が胸に響く。Kさんの家に泊まり、海岸で拾った位牌の欠片を見ながら、精神を病んだ母から家を追い出されたこと、忠雄の子を妊娠し墮胎したことを回想する。

Kさんの家から帰り、叔母とのやりとりを思い出す。以前、母の妹と名乗る南野あきから、榎と榎の父が姉を捨てたと非難する手紙を受け取った。手紙に書かれた番号に電話をかけると、あきは諫早の家に姉を見に行ったことや、実母に会って後悔したことを話す。

叔母のことをKさんに話したいと思うが、テレビ局のディレクターの矢田から入院したと聞く。矢田は、原爆投下予定地だった小倉に住む榎は浦上を小説に書いて生きるべきだと伝える。榎にとって、小倉の勝山公園にある原爆慰霊碑は、なぜか夜叉のような母の顔と重なり怖ろしい。療養で浦上を離れていたために原爆を免れ、諫早の水害でも無傷だったことから、後ろめたさも感じている。

局から帰るときに矢田から橋村良夫の手紙を渡される。かつて気持ちを寄せていた良夫の手紙を読むうちに、首の湿疹がひどくなり、長く眠っていた病根が表層に現れたように感じる。良夫の診察を受けるため、長く遠ざけていた諫早に水害後初めて足を踏み入れる。

良夫の診察を受け、昔N先生から古い衣類だと言われた湿疹の原因が、現在の医学では不明だと説明される。榎は思いがけない陥穽が出現したような衝撃を受ける。それは原爆のことを忘れて生活しようとして来た小倉が原爆投下予定地だと知ったときに似ていた。さらに良夫から、軍医だった榎の父が、胃がん手術を受けたこと、遺骨収集のためにニューギニアに行きたいと話していたこと、榎が幼児の頃に小倉の陸軍病院にいたことを初めて聞く。榎は何も知らずに三度小倉に住むことの不条理を感じるのだった。(楠田剛士)

霧雨

初出 「イリップス II nd」二八（二〇一九・七）〜三七（二〇二二・七）、「イリップス III rd」一（二〇二二・一〇）

涼子に康から電話がかかってくる。別れた元夫の康が再婚する話は、涼子には思いがけないことだった。それ以前に涼子が再婚し、子供が生まれたときには、康からお祝いのおくるみが送られてきた。その薄い黄色は、涼子が中学生の頃、母が霧雨のなかで突然知らない歌を歌ったとき足元に咲いていた小さな花を想起させた。

康の電話から二〇年近くが経つ。涼子は原爆投下予定地だったことを知らないまま小倉に戻り小説から長く離れていたが、同人誌に連載した小説を本にして出版する。本の紹介記事を書いた新聞記者を通じて康の連絡先を知り、迷いながらも電話をかける。

康のことで思い悩む涼子は、専門司のM精神科病院を受診し、浅木医師から中程度のうつ病だと告げられる。病院近くの集落で真っ赤な枝垂れ紅梅を見かけ、強い印象を受ける。三日後、康から電話があり、いまの妻がうつ病であることを聞く。涼子は驚き、自分もうつ病であることを明かす。電話の終わりに、母が一人で見に行つたという島原の干潟の海を訪れたいことを話す。

数日後、涼子は浅木の再診を受ける。自分の話を微笑みながら聴く浅木に安心感を覚え、定期的に通院するようになる。浅木の診察を受けながら、長い間思い出したくなかった原爆後の母の姿はつきりと思ひ出す。そして、原爆で殺されたり傷を負ったりした人々が、人間らしく蘇り未来に生きる姿を作品に書きたいと浅木

に話す。

病院から帰って五日後、涼子は康に電話する。そのなかで、母に追い出されてK市の温石湯に行った過去を思い出す。涼子が温石湯に行つたのは一度きりで、温泉宿で働くせりさんという中年女性に、原爆で精神を病んだ母について話していた。そのことを思い出した涼子は再び不安な気持ちになる。翌日浅木の診察を受け、母から離れて生きてきたことの罪悪感を打ち明ける。

ひと月過ぎたころ、涼子は浅木からもう大丈夫だと言われる。見捨てられたような気がして心許ない涼子は、通院を続けることを希望する。浅木から、実母の腕の中で死んだ青年の話聞き、母が兄の遺体をいつまでも抱きしめていたことや、母を縛っていた紐が娘にとりついたように感じたことを回想する。娘の電話の後には、中学生の頃に母と暮らしていた諫早の家を思い出す。川岸にあった家は水害によつて流されたが、涼子は母に追い出され諫早を離れていたため無事だった。その負い目と母を思い出したいくない心理によつて、諫早には長く足を踏み入れなかった。しかし五年前、地元の図書館から講演を依頼されたのをきっかけに訪ねるようになった。

走り梅雨が通り過ぎた日の翌日、涼子は急に思い立つて島原の干潟の海を見に行くことにする。小倉から諫早に向かい、諫早駅から島原鉄道の電車に乗る。下りた大正駅は狭いホームの無人駅だった。涼子は母が一人で来たときも淋しい駅だったのだろうと想像する。駅舎のすぐ近くに、母が世話になった森本屋という割烹旅館があった。女将のあさ子に母が来たときの話を聞いていると、いつの間にか夕暮れになっていた。涼子は今夜森本屋に泊まることにした。

（楠田剛士）

昼の月

初出 「イリプス Ⅲrd」三（二〇二三・四）〜一〇（二〇二五・

一）（※八回まで連載中）

育代は荒川正人から来た葉書を何度も読み返す。葉書には、神奈川の文学館の原爆文学展で育代の作品が展示されていて懐かしかったことが書かれており、最後に「執筆は続けていますか」と添えられていた。育代は浦上の原爆で兄を亡くし、その衝撃で精神を病んだ母をテーマにした小説で文学賞を受賞したが、小説を書かなくなつて十年以上経っている。いまは放送の仕事をしているが、葉書を眺めながら忘れていた何か突き上げてくる感じがする。

A局でインタビュアーの仕事が終わると、不意に母の声を思い出す。母は乾燥した葉草を（ゲンノシヨウコにイワチシャー）と歌うように言い、葉草を売りながら兄のところへ行こうとしていた。そのことを営業の藤田に話すと、再び小説を書くことを勧められる。

帰宅したその夜、正人へ手紙を書きながら小説を書くことについて考える。東京にいた頃の担当編集者だった柏木とは疎遠になっている。藤田から電話があり、経理の谷本と育代が付き合っている噂が流れているという。谷本とは昼顔の群生地を見るために一緒に口之津に行ったことがあった。谷本とのやりとりを思い出しながら、誰かに言われなければ小説を書けない自分の姿を情けなく思う。

仕事でA局に出かけ谷本に会うと、噂は気にせず今まで通り友人でいてほしいと言われる。谷本が口之津行きを振り返り、上空に昼の月が霞んで見えたことに触れると、育代は昼の月を歌った母に

ついて思い出す。その後のインタビュアーの仕事でも、赤子を亡くした芝居の座長の話を聞いたことで、母のことや原爆で亡くなった兄の骨のことを考える。

正人からの電話を待つ間に、東京にいる娘から手紙が届く。手紙には育代の最初の小説を読んだことや、育代の母との繋がりについて書かれていた。育代は手紙を読み、娘には生きている母が死んでしまったと嘘をついてきたが、大きな罪ではなかったかと考える。

翌日A局に行き、娘の手紙のことを谷本に話すと少し気が楽になる。しかし母を戦時の中に凍結させたものへの怒りはおさまらず、また怒りをどこへ向ければよいかもわからない。

数日後、娘から速達が届く。「お母さん、書いて生きてください。そして、小説の中でお母さんのお母さんに会ってください」と書かれた手紙を何度も読み、重苦しい気持ちが増す。返事を書くことしていると娘から電話がかかってくる。娘は、育代の母が生きていたことを知っており、育代の母がリリヤンで編んだ紐と防空頭巾を見つけていた。電話の最後でも小説を書くように言われるが、育代は書く自信が持てない。

電話の後、しばらく母のことを考える。紫陽花の咲く公園で煙草を吸う老婆を眺めていると、紫陽花を活けた母の記憶がよみがえる。すると正人から電話があり、「直接被爆していないあなたがお母様のことを書くのは宿命ではないでしょうか」と言われる。

電話を切った後、ぼんやりと公園を眺める。父との関係を疑う母の言動や、母の実母に会いに行ったことを思い出し、養子に出された母が急に哀れに思えてくる。育代自身も自分の居場所がないような寂しさを感じ、小説の中で母に会いたいと考える。（楠田剛士）